大須賀一雄 武蔵野スケッチ物語

吉祥寺南町一丁目にて

no.67

見慣れた風景も、絵になるとちょっと違う趣が出てきます。
そんな武蔵野の風景を、大須賀一雄さんが春夏秋冬で切り取って描きます。

この作品は、前方に井の頭公園を見ながら、椅子に座って描いたものである。

写生中、絵を覗いた人から、「今描いている絵は、家に帰ってから仕上げるのですか」とよく聞かれる。その都度、「私は現場主義なので、絵はその場で仕上げます」と答えている。

また、「動いている人をよく描けますね」と言われることもあるが、「これまでたくさん描いてきたので、動く人も描けるようになりました」と答えている。事実、動いている人を見た瞬間、形と色を記憶できるので、絵の中に描けるようになったと思っている。

最後に、今、絵を勉強されている人に参考になるかと思われる自作の詩を紹介したい。

平地で街角写生の時は
仕上げを意識して目線を決める
人の頭と車の屋根は
必ず目線の上方にくる

（絵と文：大須賀一雄）

Profile

大須賀一雄
（おおすか かずお）

水彩画家。1937年群馬県出身。武蔵野市在住。画材は透明水彩。元JR東日本国際課勤務。JR東日本絵画クラブ初代事務局長。これまでJR東日本の駅の絵を1000点以上描き、新聞、雑誌、テレビなどでも紹介されている。著書は『あなたの街の駅物語』（日貿出版社）、『スケッチお手本帖』（素朴社）、『透明水彩の世界・ヨーロッパ』および『緑』（旅もようスケッチ会）ほか。現在、JR東日本の大人の休日倶楽部のカレンダーの絵を担当。海外スケッチ旅行歴も長く、これまで50カ国以上を訪れ、個展も30回を超える。